

## 虹と日本文藝（七）

—比較研究資料私註(7)—

荻 野 恭 茂

32

檜の木が切られると、

忌まわしい木が倒れると、

太陽は輝きだし、

220 月が照り始めた、

雲は長く流れだし、

大空に虹がかかった

taivon kaaret kaartamahan

霧の深い岬の先に、

靄の濃い島の端に。

「大きな檜の木」……………(a)

215 若いヨウカハイネンは言った。

「まだ少しは覚えていて！

このような頃を覚えていてぞ、

「呪詛競べ」……………(b)

俺が海を鋤いていたとき、

海の窪みを掘り起こし、

220 魚の洞窟をうがち、

深淵を深め、

湖水を沈め、

山々を覆し、

岩石を積み上げていたときを。

225 「すでに俺は六番目の人で、

七番目の男だった

この大地を作り、

大空を築き、

空の柱を立て、

230 天の虹を運び、 taivon kaartta kantamassa,

月を導き、

太陽を助け、

北斗を正して、

空に星を散りばめたときに。」

235 老ワイナミヨイネンは言った。

「確かに嘘を言っている！」

お前はそのとき見てはいない、

海が鋤かれたとき、

海の窪みが掘り起こされ、

240 魚の洞窟がうがたれ、

深淵が深められ、

湖水が沈められ、

山々が覆され、

岩石が積み上げられたそのときに。

245 「お前を見たものはありはすまい、

見られも聞かれもしていない

この大地を作り、

大空を築き、

空の柱を立て、

250 天の虹を運び、 *taivon kaartta kannettaissa,*

月を導き、

太陽を助け、

北斗を正して、

空に星を散りばめたときに。」

さてポホヤの乙女は美しかった、

国でも海外でも名高く優れ、

「ポホヤ乙女」……………(c)

大空の輓の上に坐り *Istui ilman vempelillä,*

虹の上で輝いていた *taivon kaarella kajotti*

5 清純な衣をまとい、

白い着物を着て。

黄金の梭から、

銀の箴を使つて

黄金の布を織り、

10 銀の布に気を配つた。

握っている箴が唸り、

手中の糸巻きが回転し、

銅の掛け糸が軋み、

銀の箴が響いた

15 乙女が布を織るときに、

銀の布に気を配るとき。

強固な老ワイナミヨイネンは

けたたましく走つていった

暗いポホヨラから、

20 霧深いサリオラから。

少し旅を続け、

わずかばかり進んだ。

上の方から、頭上から

梭の響きが聞こえてきた。

25 そこで彼の頭を上げて、  
大空を眺めた。

虹が綺麗に空にかかり、

乙女が虹の端にいて、 neiti kaaren kannikalla,  
黄金の布を織っていた、  
30 銀の布も鮮かに。

「黒い蛇よ、地下のものよ、  
760 トウオニの色した蛆虫よ、  
土の色よ、ヒースの色よ、  
すべての空の虹の色よ！  
さあ旅人の道から去れ、  
前進する勇士の前から！  
765 旅人を行かせてやれ、  
レンミンカイネンを通してやれ  
かのポヨラの宴会へ、  
索性よい人の会食へ！」  
そこで蛇はすすご退いた、

kaiken ilmankaaren karvai

「サンポ奪回へ出発」……………(e)

彼は耳が鋭くて、  
目はそれよりも優れていた。  
眼差しを北西に投げた、  
首を日の方へと向けた。  
345 遠くに虹が見えた、 kaaren kaukoa näkevi,  
さらに彼方に雲の群れが。

実は虹ではなかった Eipä kaari ollutkana  
また小さな雲の群れでもない。  
舟が走っているのであった、

350 舟が進んでいるのであった  
澄んだ海の面を、  
広い大海原を、  
高潔な人が舟の艫に、  
雄々しい人が漕ぎ台に。  
335 むら気なレンミンカイネンは言った。

長老が歓喜の調べを弾くときに、  
ワイナミョイネンがかき鳴らすとき。  
「ワイナミョイ……………(f)  
ネンの演奏」

95 大気 of 自然の乙女自ら、  
素晴らしい大空の処女も、  
歓喜の曲を讚美した、  
カンテレに聞き入った。  
ある者は大空の輓の上で、 mikä ilman vempellä,  
100 天空の虹の上でにこやかに、 tai von kaarella kajotti,  
ある者は小さな雲の上で、  
ばら色の縁まで目映く。

かの月の乙女、優美な処女、  
才たけた太陽の乙女子は  
105 その織機の箴を手にし、  
その掛け糸を上げていた、  
金の布地を織っていた、  
銀の布を編み鳴らした  
赤い雲の端で、  
110 長い虹の先で。 pikkän kaaren kannikalla.

彼女たちが耳にしたとき  
その妙なる調べの音を、  
握つていた箴が抜け、  
桴が手許から滑り落ちた、  
115 金の布糸が断ち切れて、  
銀の掛け糸がかすかに鳴った。

(ゴシック体＝稿者)

私註 (一) 『カレワラ』 (Kalevala) (二) (a) 第一章 「大きな樫の木」 217行～224行 (b) 第三章 「呪詛競べ」 215行～254行 (c) 「ボホヤ乙女」 1行～30行 (d) 「レンミンカイネンのボホヨラ婚礼旅行」 759行～769行 (e) 「サンボ奪回への出発」 341行～355行 (f) 「ワイナミョイネンの演奏」 93行～116行 (三) フィンランド叙事詩 (＝古代民族詩集) (四) 天地創造～フィンランド古代 (cf. 「フィン・ウゴル語族は紀元前二五〇〇年頃さらに分かれるが」と「概説」にある。クロン説は、「本体は戦争、略奪が横行していた一〇〇〇～二〇〇〇年頃の冒険心に富んだバイキング時代に成立したもので、キリスト教が異教を駆逐しつつある時期を背景にしている。」「[五] フィンランド古代人 (ウラル語族)。シャーマン＝大口誦詩人バンニネン O. Ynninen、大詩人ベルットウネン A. Pertunen、大吟誦詩人シッソネン S. Sissonen 他 (採集・記述・編集・部分的創作) Ⅱ エリアス・リョット Elias Lönnrot (1802～84) 日本語訳 Ⅱ 小泉保 (六) 『カレワラ』 (上・下) 岩波文庫 (1982、岩波書店) (七) (a) Ⅱ (上) P 26 (b) Ⅱ (上) P 39 40 (c) Ⅱ (上) P 96 97 (d) Ⅱ (下) P 57 (e) Ⅱ (下) P 225 (f) Ⅱ (下) P 243 (八) 資料 31 の詩の最上段の番号は「行目」

を示す。(虹) の出てくる行のみ原文を付した。「カレワラ」は、リョットによると、カレワの勇士たちの国。「カレワ」は、フィンランド人の最古の祖先で、ワイナミョイネン・レンミンカイネン・ヨウカハイネン、等は異教のある時代におけるカレワの後裔であるという。また訳注によると(e)の「サンボ Saunpo」は呪的秘器で、未詳。「高潔な人」は「英雄・大詩人・老ワイナミョイネン」。「大空の轡」Ⅱ (虹) Ⅰ という。

〔考〕 (虹) についてみると、神話的叙述の中であるが、大むね、天体気象現象としてとらえられていて、原初的な、動物的 (天蛇的) 認識は見られない。そして、(d) 以外は総て、「瑞象」的享受のようである。(d) だけは、「黒い蛇」すなわち、「自ら創造を開始した。ヒースはこれに命を与えた、忌まわしいいやな奴の唾液に、人食い女の吐いた唾に。これが毒蛇に変わった、黒い蛇に変形した。」(同章 723行～728行) とあり、それと同列に表現されていることから、瑞象ではなく、妖象・凶象であろう。とすると、この部分のみ、中国の古代 (cf. 1 私註) と共通している。よくよく吟味すれば、(虹) は、蛇や蛆 (虫) との (たぶん無意識の) 並列の中に、かすかに原初の認識が残留、垣間見られているのかも知れない。また、第一章の「天地創造」の「伝承の中には卵性神話と海中攪拌神話が混在しているようである。そして卵が碎ける要因は『風』の靈力にあるとクーンシ (1963) は主張している。しかし海を掻き回して天地を創造する攪拌のモチーフは、日本のイザナギ、イザナミの天の浮橋での創生神話と一脈通ずるところがあるようである。」(小泉保解説) とあるが、これを (虹) に関して類推してみると、(e) の、ボホヤ

の美しい乙女の「大空の輓の上に坐り、虹の上で輝いていた」や、「虹が綺麗に空にかかり、乙女が虹の端にいて」や、「大空の自然の乙女自ら、……ある者は大空の輓の上で、天空の虹の上でにこやかに、……等は、(虹)を、日本神話の「天の浮き橋」に一面置き換え得る性質のものである。」

また、(c)のボホヤ(IIボホヨラ)は、「海のかなた」(小泉保)の他界(常世)——ハルバ(1945)によると「天国」——のようであるとすると、(虹)は、他界と此界との間の、一種の美しい架橋(「天の浮き橋」)のようである。そして、この(虹)の上で機を織る美しい乙女に、ワイナミョイネンが求婚(「おいで、娘さん、わしの機に、降りておいでわしの機へ!」)するが、乙女は、いくつもの無理難題を要求し、結局不成功に終る。日本の『竹取物語』のモチーフに一脈通じている。他界(天界)——此界(地上界)往来のモチーフも、その芽生えの段階において、(虹)が関与していよう。

遠い森と湖の国の古代との類似発想である。

(注1) 沖縄諸島中の小浜島には、(虹)を、「チネー・シマン・テー」

(天の蚯蚓)と呼ぶ。(宮良当壮「虹考」)

(注2) (d)の「空の柱」も、日本の『古事記』の「天の御柱」と類似している。

(注3) (f)の109行に「赤い雲の上で」とあり、これは仏教の来迎図や、雷神想像図のごとき神話的認識であろうが、「橋型」発想としては、(虹)の方がナチュラルである。

(注4) 人種的ルーツも重なる面がある。フィンランド人は、ハンガリー人などと同じくアジアから入ってきた民族(フィン族)。ヨーロッパスタイルの生活・文化を築いたが、言語や伝承はア

ジア的なものが多い。ゲルマン系、ラテン系等と異なる。

(補注) 序ながら、第十五章の580行に水に関係する「翼蛇」(一伝説上のドラゴン)がでてくるが、「橋型」より古いもので、(注1)と同じく原初的感覚の残留したものであろう。

ja [KALEVALA-THE LAND OF HEROES-Translated by W. F. Kirby] による。

There to drift in Tuoni's river;

And he raised a water-serpent,

From the waves a serpent lifted,

Sent it forth to me unhappy,

(本資料閲覧に関し、本学教授・柴田正氏の御協力をたまわった。多謝。)

### 33

The Norse Bifrost is the bridge over which Heimdall stands guard; at Ragnarok the frost giants will storm the bridge and raid Valhalla, breaking the bridge into bits. This rainbow bridge flames in three colors, keeping the giants from mounting it lest they melt; but when the bridge cools the way will be open. Bifrost is not identified with the rainbow in the *Elder Poetic Edda*, but Snorri Sturluson's *Prose Edda* so names it.

私注 (一) ユフロスト (二) 北欧神話 (四) (五) 北欧のゲルマン人 (六) Standard Dictionary of Folklore Mythology and Legend by Funk & Wagnalls. In New York. (七) d 922 (八) Bifrost 神が天上から地上にかけた虹の橋。Heimdall 虹の橋の番人。Ragnarok 北欧神話の神々の黄昏、世界の終り。Valhalla 北欧神

話の天国。

〔考〕世界の終末的設定については、逆説的に一面、『旧約聖書』(Ⅱ<sup>29</sup>)と通う。〈虹〉を〈天地をつなぐ橋〉とする点は、概念的には、ギリシャ神話『イリアス』の場合(Ⅱ<sup>31</sup>)と通う面もあるが、「橋」の具象性はより強い。この「橋」的発想、または修辭上のメタファーは、中国では唐詩あたりから、その具象性は顕著になってきている。(それ以前は「龍舟」<sup>(注1)</sup>が仙界昇仙のための渡し舟として其の役を果していた。この同型は、タヒチにもあり、王の航海する棹舟の名が「アヌアヌア」(anuanua)と呼ばれ、〈虹〉を意味していた。)かく北欧神話や古代中国においてのみならず、〈虹〉は、フンク・ワグネル両者の言のごとく「幾多の民族の神話の中で虹は天と地との間の橋である」<sup>(注3)</sup>たようである。原初的発想の《天蛇》型の次段階において、ほぼグローバルに広がっているもので、いわば《橋》型発想とタイプ付けられるほどのものである。ただし、正確にいうと、この間にもう一つ過渡的な存在として、「蛇橋」型がある。これは、「新幾内亞の原始民稱虹爲『蛇橋』」(王孝廉著『花與天神』)、すなわちニューギニア原始民等に見られるものである。このプロセスを経て文化的に発展した《橋》型発想を、例証的に掲げるならば、上掲、北欧神話、フィンランド古代叙事詩『カレワラ』<sup>(注4)</sup>、ギリシャ神話、古き代の中国の詩、モンゴルの叙事詩『ゲシル・ボグドゥ』<sup>(注5)</sup>、その他、北アメリカの各種インディアン、オーストラリアやドイツの一部、インドネシアのプギ族やマカサル南西部住民(の天地開闢神話)、セレベスやボリネシアの、ハワイ、メラネシア方面、インド、バビロニア、中央アジアの伝説、台

湾、朝鮮、等である。それらはおおむね神靈・精靈・死靈の往来する道である。しかし、その通行権にはしばしば条件が付けられている。すなわち選択されることがあるのである。これらの事実は日本南島・宮古島の神話の古伝、創世神のたつ天空の橋「天の夜虹の橋」<sup>(注6)</sup>(慶世村)や、本土の神話『古事記』中の「天の浮橋」という文藝的表現や、『丹後風土記』中の「天の椅立」、『播磨風土記』中の「八十橋」、『万葉集』中の「天橋」、中世の詞曲詩上に散在する「天の浮橋」とも比考されよう。さらに、近世、近松の「虹の橋」、長唄『岸の柳』の「虹のかけはし」、また、近代以後の数々の作品に多出する「橋」あるいは「橋」的表現の系譜的先蹤であろう。

次に〈虹〉の「色」の種類・数についてみると、中国の古代では陰陽五行説の影響下、おおむね「五色」(Ⅱ五方正色《青・赤・黄・白・黒》か、五方間色《緑・碧・紅・紫・瑠黄》)であつたが、アフリカのブッシュマンの壁画では、黄・赤の「2色」、アメリカ・インディアンにおいては「3本の線」(3色?)であつたが、この神話では、燃えたつ「3色」となっている。このことも日本との比考資料となる。この「3色」について考えるに、この「3色」は普通の場合の3原色、<sup>(注7)</sup>「赤・黄・青」のことかと思われる。その中主たる色は、「黄」かと思われる。波長の一番長いのは「赤」であるが、ヨーロッパでは「炎の色」は明るい「黄」が強いようである。ウル・デ・リコの『虹伝説』中の絵の中の焚火の炎の色も、ふちはやや赤っぽい、ほとんどが黄である虹を食べる7色の鬼の首領も「黄」鬼である。(一番弱虫の「藍」鬼の「藍」色は弱々しくてほとんど見えない。)

鈴木孝夫著『閉された言語・日本語の世界』——新潮選書——によると、太陽の色も「英語では黄色に決っている」そうである。ゴッホの絵の太陽の場合の色も同様であろう。

上掲[3]の虹の話の異伝として、「北歐人の間には、オウチンが天上の宮殿を造つて後、小人の助けによつて、ビフレエストという橋を架けて渡つた。この橋が即ち虹だと考えられて居ります。虹が三色をなしていて、真中の赤色であるのは火が燃えているからで、この橋を登つて行くだけの資格のない者は、この中で焼いてしまうのです。」<sup>(注18)</sup>というのがある。3色であるのはわかるが、赤が「真中」というのは科学的には不可解である。神話的主観的表現であらう。とまれ、「三つの色に燃えたつてゐる」という前者の方が、不動尊の火災のごとき迫力において勝っている。ふと気づいたことであるが、(虹)の色を3色と観じるのは、古今東西を通してそれほど奇異なことではないようである。現に、稿者の机上にも、3色の(虹)が、印刷された色鉛筆用の角型ケシゴムが載っている。

しかし、一般的に現代の日本では(虹)は「7色」<sup>(注20)</sup>と言われているが、日本の文献中、管見に入つたもので言えば、岡村良通著す所の随筆『寓意草』(1750ころ)が一番古いものである。

(注1) 曾布川寛著『崑崙山への昇仙』(昭36、中央公論社)。

(注2) W・ペアリー著 加藤一夫訳『古代文明研究』上巻(昭6、春秋社刊『世界大思想全集』P240。なお、「王の住む家は『天の雲』と同義の「アオリイ」(aori)の語で呼ばれ、王の声は『雷火』、王居に燃える炬火の光芒は『電火』と名づけられ」す

べて、天上界のものとなつてゐる。

(注3)・(注6) 両者著前掲「六」辞書。

(注4) 資料[32]

(注5) 「ヒマラヤからバイカル湖にかけて広範な地域に分布するモンゴルの神話的英雄叙事詩。モンゴルの神の子ゲシル・ボクドウの事跡を語るもの。(山本節著『神話の森』P43)。

(注7) ベアリング・グウルド著、今泉忠義訳『民俗学の話』P169。

(注8) 松本信弘『日本神話の研究』P188。この神話の中に「太初に天神の子が人類のため地を經營する命を受け、虹の橋によつて地上に下り、その仕事が終わつてから天界に下りし三人の男、地又は地下界より来た三人の女と婚し、人類の祖となる。」とある。(…印||稿者による)

(注9) 前掲「六」辞書。

(注10) 古野清人・馬淵東一筆「虹をめぐる高砂族の口碑と習族」(『旅と伝説』第十一年第七号)。

(注11) 『カタ・ウパニシャッド』(注12) Katha Upanishad。ただし、天界への輝く虹の橋を渡るのは、その正邪によつて難易がある。神話に類型多し。

(注12) 山下主一郎・他訳『神話伝承事典』P266。

(注13) 資料[22]中。

(注14) (注10) 論文ならびに、小泉鉄筆「蕃人の慣習と土俗」(雑誌『改造』昭和五年十二月号)所収「オットフ」信仰。このオットフ(死霊または精霊)信仰の特色は、「善き」オットフは、時々海の彼方の浄土から(虹)の橋を渡つてやつてきて遣族や族衆に幸福を授ける——ことである。(cf. [27])

(注15) [26]—(c)(d)(e)参照。

(注16) 「オレンヂ自由国を流れるカレドン (Caledon) 河南岸の小丘の洞穴中に「虹を背負う女の雨 She-rain」とブッシュマン自らの説明する壁画が残されている。形は牛の如く、全身にわたつて上部に黄と赤の二色で表された虹を横たえる。」(石田英

一郎著『河童駒引考』P106)

(注17) 時板誠記・吉田精一編『国語中辞典』(昭48、角川書店)に

「①普通の絵の具では、赤・青・黄の三色。光では赤・青・緑の三色をいう。」とある。

(注18) ヘアリング・グウルド著今泉忠義訳『民俗学の話』P168。

(…印は稿者)。

(注19) ERASER FOR COLORED PENCIL-SEED made in japan. ただ

し、色は赤。

(注20) 世界の古代を見渡すと、訳者の先入観が入っているかどうかは定かでないが、北極圏のエスキモー人の詩の〈虹〉(≡24)と、インドネシアの昔話に出てくる〈虹〉(≡28)に、その「マ色」が見られた。

# 34

In Europe, it is believed that anyone passing beneath a rainbow will be transformed, man into woman, woman into man. In Rumania, for example, it is said that the rainbow stands with each end in a river, and anyone creeping to its end on hands and knees and drinking the water it touches will instantly change sex. (See below for the connection of the rainbow with the serpent, and compare THESIAS.)

私註 (一) 〈虹〉による性転換信仰 (三) ヨーロッパの俗信

〔四〕?〔五〕?〔六〕33と同〔七〕P 922

〔考〕この、ヨーロッパに伝わる、虹の下をくぐり抜けたり、虹の根の触れている所の水を呑むと、男は女に、女は男に変身するという、いわば、虹による《性転換》信仰は、この俗信の型

としては特異なものようである。初等数学における移項のようで面白い。これも、いつかどこかで、東洋の「陰陽道」思想が(脚注にも暗示されているごとく)雌雄淫着性の濃厚な「蛇」信仰と結びつつ混入し、変容をきたしたものかも知れない。

# 35

The great snake of the underneath, the rainbow serpent of Yoruba, is, like many other mythological serpents, an earth god. He comes from the earth to drink in the sky.

私註 (一) 西アフリカのヨルバ族の〈虹〉(三) アフリカの俗信

〔四〕?〔六〕33と同〔七〕P 922

〔考〕〈虹〉を地下の大蛇と観じている。それは大地の神でもある。その蛇は大地から天空へ水を飲むために来るのである。天蛇型と比べ、その発想が正反対である所に特色がある。かくて、大地の主である蛇神が天空をも支配し、大切な気象をも支配していることになる。小島璣禮編『蛇の宇宙誌』(1991、東京美術)によると、この型は、アフリカのみならず、インド・オーストラリア・アメリカ等にも残っており、「日本でも、大地の主の蛇の信仰があり、それが雷神信仰の形をとっている。日本の虹の観念も、アフリカなどの蛇信仰と同じ基礎に成り立っていた」という。〈虹〉と日本文藝を考える際にも一つの示唆となる。



36

（前略）

マザレばあさんは、はなしはじめました。「みずうみに いってで  
きるだけ みごとな にじを かけるのじゃ。オンディーナは きつ  
と にじをみにくるだろう。そうしたら おまえは、ほうせきうり  
に ばけて、きれいだな。」この にじの かけらで、ほうせきを  
つくるうーと いって、にじの はしを ちゃんと きって、ほ  
うせきぶくろに いれてみせる。しばらくして、さっきのにじが  
ほうせきに かわったような ふりをして、ほんものの ほうせき  
を とりだして おひさまに ひからせて みせるんだ。オンディー  
ナめ、きつと その ほうせきが ほしくなる。そうしたら、ーう  
ちへ いけば、もつと きれいなのが たくさん あるよ。ほしけ  
れば ついておいでーと いうんだ。あいつは きつと おまえに  
ついていくだろう。」

Ⅱ A

（中略）（宝石売りに化け忘れた、まぬけな）

まほうつかいは、いきなり にじを じめんに ひきづりおろしま  
した。そして、ずたずたに ちぎって、みずうみに なげこみまし  
た。にじの かけらは、きらきら ひかりながら、みずうみの そ  
こに しずんでいきました。そのひから、このみずうみ みずは、  
うつくしい 七いろの にじの いろに かわりました。 Ⅱ B

私註「（一）『にじのみずうみ』1970、偕成社（二）中部・末部

「（三）イタリアの昔話「四」？「五」文・坂本鉄男 絵・岩崎ち

ひろ「六」「二」に同「七」P 19・20 Ⅱ A P 30・31 Ⅱ B

〔考〕この絵本の文を書いたイタリア語学者の坂本鉄男は「に  
じのみずうみ」は、イタリア北部につたわるむかし話です。（略）  
けしきの美しいところには、その美しさに関係のある伝説や民  
話がつたわっているものですが、このカレッツァ湖も、ほんと  
うに虹をとかしたような、日本では考えられないほどきれいに  
澄んだ水をたたえた湖です。（略）と記しているが、もとは、  
その美しい湖の水の色の由縁を説く、いわば類型としてよくあ  
る成立伝説である。B部がそれにあたる。A部は、その湖に住  
む、美しい水の精・オンディーナを好きになった、深い森に住  
む、まぬけで醜い若い魔法使いは、あの手この手で水の精をつ  
かまえようとするが、ことごとく失敗する。そこで、大先輩の  
魔法使いであるマザレばあさんに知恵を拝借することにしたが、  
そのマザレばあさんの考えた策略である。

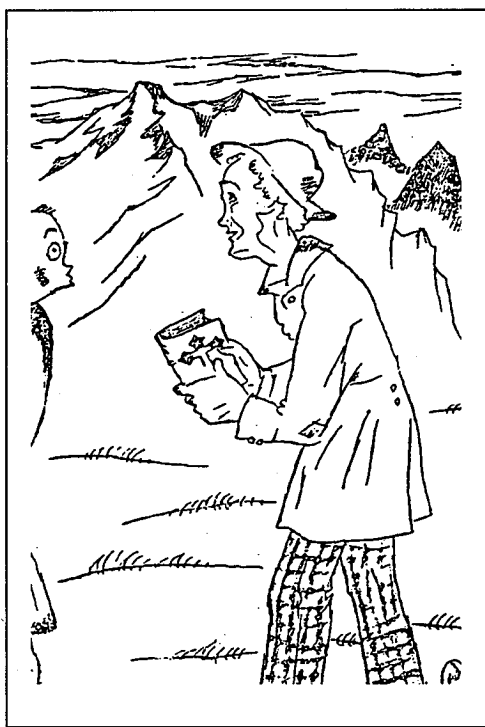
（a）部には、次資料37ほど直接的ではないが、その発想の奥に  
《虹脚埋宝》説話が隠されているようである。この話が「ドイツ  
語系住民のあいだにつたわったもので」（坂本鉄男記）あること  
とも関係があるろう。（虹）と（宝石）との関係、堅密度はやや薄  
められてはいるが、それはそこに文藝的創意が働いているので  
あろう。「七いろのにじ」というのも、昔話としてはやや現代臭  
がある。37の発展型と見ておけばよからう。

37

昔、小さな町に、シンギーといふ男が住んでいました。たいへん

欲の深い男でしたので、みんなからきられてゐました。

ある時シンギーは、町を通つた旅人から、虹の脚が地面にくつていてゐるところを掘ると、黄金がいくらでも見つかるといふことを聞きました。旅人の話を聞いたとき、シンギーは二つの眼を團栗のように圓くしました。それからといふものは毎日々々その話ばかり頭の中でくりかへして、一しようにけんめいに虹の立つのをまつてゐました。



とうとうある夏の夕の雨あがりの空に綺麗な虹が現れました。シンギーは急いで物置きからしゃべるを取り出して、氣でも狂つたよ

うに内を飛び出しました。シンギーはしゃべるを肩にしたまゝ、空ばかり見つめて、どこまでも、どこまでも歩いて行きました。が、森をぬけても川を渡つても、それから廣い野原を越えても、やつぱ

り虹は遠方にかゝつてゐます。いくら行つても虹の脚が地面にくつていてゐるところには出會ひません。

そのうちに虹は夢のようにふつと消え失せました。シンギーはもうがっかりして、しゃべるを投げ出したまゝ、草原の中にぐたりと倒れてしまひました。

「あゝあゝ、ひどいめにあつた。どうだ、着物も何も泥だらけだ」

シンギーはかういつて、大きな溜め息をつきました。けれども根が大へんな欲張りなので、そのまゝうちに歸らうとはしないで、どこといふ目當てもなくのこゝと歩き出しました。シンギーの考へでは虹の脚が地面にくつていてゐるところを見つけるまでは、幾月でも幾年でも歩き廻るつもりでした。

シンギーは、日がかんく照りつけても、雨がざあく降り續いても、しゃべるを肩にしたまゝ平氣で歩きつゞけました。その間に虹は幾度となく空に現れましたが、どうしても地面にくつてゐるところは見つかりませんでした。

家を出てからちやうど三年三月になつたある日のこと、シンギーは歩きくたびれて野中の杉の根元に寝ころんで、うとくなつてゐました。すると頭の上で、

「まあ、きれいな虹だね」

「ほんとに綺麗だね。あの虹が地面にくつていてゐるところには、どつさり黄金が埋まつてゐるがね、人間のどんまにはとてもわかるまいよ」

「わかつてもだめさ。そこまで行くうちには消えてしまふから」

「なにそれにはいゝことがあるんだ。虹の方を向いてね、一息に、虹さん、虹さん、消えるなよ。おれが行くまで消えるなよ」と三度

唱へると、どうしたつて消えつこはないんだから」

「おい、く、めつたなことを喋つてはいけないよ。下に人間が寝ころんでゐるぢやないか」

「大丈夫だよ、ぐつすり寝込んでゐるからね」

といふ話し聲が聞えました。シンギーはそれを聞くと、もう嬉しいので胸がわくわくして來ました。そしてそつと眼を開けて見ますと、杉の小枝に二匹の鳥がとまつてゐました。シンギーはいきなり立ち上つて大きな聲で、はーと、叫びました。鳥どもはびっくりして、ばた／＼と羽叩きして逃げ出しました。それを見向きもしないで、シンギーは虹を見つめたまゝ、一息に、

虹さん、虹さん、消えるなよ。

おれが行くまで消えるなよ。

と三度唱へました。そしてしゃべるを擱むなり、一さんに虹を目がけて駆け出しました。

一町、二町、三町、夢中になつて駆けて行くうちに、だん／＼と虹の橋に近づきました。半里もひた走りに走りますと、まあ、どうでせう。鮮かな七色をした虹の脚は、とある泉の傍で、吸ひ込まれるように、地面にくつついてゐるではありませんか。

「しめた」

顔を眞赤にして、だ／＼と汗を流してゐるシンギーは、覺えずかう叫びました。さうしてすぐにしゃべるを閑かしてそこを掘り始めました。小石混りの土をぐん／＼掘り下げてゐるうちに、たちまち、かちりとたゞならぬ音がしました。

シンギーは、しゃべるを投り出して覗き込みました。とたんに眩しい光がさつとあたりに迸りました。穴の底には數へても數へきれぬ

ほどの黄金が埋もれてゐるのです。

「しめた」

シンギーの口からまた同じ言葉が迸りました。シンギーは、穴のそばにべたりと坐り込んだまゝ、黄金の中に眩まで手を突っ込んで、なんともいへぬ程嬉しそうな顔をしました。と、そのせつな、虹がさつと消え失せました。シンギーは大急ぎで黄金を掬ひ出して、かねて用意しておいた大きな袋にぎつしり詰め込みました。そしてそれを背負ひながら、しゃべるを杖に歩き出しました。あんまり袋が重いので、シンギーは齒をくひしばつて、よろめき／＼歩きました。それでも歩くたびに背の上で／＼と黄金の鳴る音を聞くと、もう袋の重いぐらゐはなんでもありませんでした。

すると道傍の小さい森の中に、手をつなぎ合せて踊り廻つてゐた森の精の小人共が、その姿を見つめました。

と、小人共は、びたりと踊りを止めて、

「おい、おい。あれを見ないか。欲張りのシンギーが、なんだか重いものを背負つてゐるよ」

「なんだらう。あれのことだから、きつと寶物でも盗み出したんだらう」

「いついたづらをしてやらうぢやないか」

「うん、それがいい、それがいい」

と、小人共は足音を忍ばせて、シンギーの後から駆け出しました。何しろ背の高さ五寸ぐらゐの小男ばかりが、草原の上を身軽に駆けるので、それにもう日も西の空に沈みかけてゐましたので、シンギーは、ちつともそれに氣が付きませんでした。

眞先にかけてつけた一人の小人は、ひらりと身を躍らして、袋に飛び

つきました。そして懐から楊枝ほどの小刀を取り出して、そつと袋の底に小さな穴を明けました。さあ大へん、黄金はその穴から一つ一つ漏れはじめました。きら／＼と夕日に閃いて地面に落ちようとする、大勢の小人共が両手を開いて一つ／＼それを受け留めます。だからいくら袋から溢れ出しても、ちつとも音を立てません。シンギーは相變らず額に汗をにじまして、のそり／＼と歩いて行きます。黄金が減るにつけて、袋の重さが軽くなつては、シンギーに氣どられるといふので、小人共は後から／＼と袋に飛びつきます。黄金が減るにつれて、袋の上の小人の数が次第にふえて行きます。そして袋のまはりに、ずらりとぶら下りながら、小さい／＼聲でくすくす笑つてゐます。やがて袋の中の黄金がすつかりなくなる頃には、袋のまはりが小人だらけになりました。小人たちは互に顔を見合して、「おい、シンギーも、ずいぶんとんだな」「おれ達を黄金と思つて、後生大事に背負つてゐるのがをかしいね」などさ／＼やき合つてゐました。

やがてシンギーは、自分の住んでゐた町はづれまでやつて來ました。と、路傍の石にどつかと腰を下して、「さあ、こゝまで來ればもう大丈夫だ。今日からは町一番の大金持ちか。おれはなか／＼の仕合せものだな」と獨言をいひました。と思ふと、たちまち後の方でから／＼と笑ふ聲がして、

「シンギーばかもの」

「何が仕合せものだい」

「町一番の大金持ちがをかしいや」

など口々に罵り騒ぐものがありました。シンギーは、びつくりし

て後を振り向きますと、大勢の小人共がひらり／＼と逃げ出してゐました。をやつと思つて何氣なく袋を下してみますと、黄金はたゞの一片も見えなくなつてゐました。シンギーは、氣が狂つたようにもと來た道にかけもどりました。が、いくらあとに戻つても、黄金らしいものは一つも見えないで、その代りに黄金色のかわい／＼花が道ばたにずらりと咲き亂れて、夕風にそよ／＼と動いてゐました。みなさん、月見草はかうして世に現れたのです。

私註「(一) アイルランドの昔話 (二) 「虹の脚」 (三) ヨーロッパの昔話 (四) ? (五) 山崎光子・松村武雄訳 (六) 『世界童話集 下』—日本児童文庫 20—(昭 4、アルス) (七) P 192-198 (八) アルス刊の日本児童文庫は、昭 2-5 に刊行され、全 75 冊。(国立国会図書館、児乙部全集—N—20) 促音不揃い。  
〔考〕まず本話の原資料については、かく児童を対象とした文芸シリーズの性質上、書誌的解題的な学術的記載が見当たらないのでよくはわからないが、民族学の泰斗・松村武雄博士との共訳になるといふ点を考えると、かなり原資料に忠実であろう—といふことを前提として考えてみたい。

A の設定と展開に見る教訓性、D にみる異界の人物像との絡み、E にみる物の性質・發生の由來談、等は、おおむね世界各地の昔話に普遍的にみられる類型的な表現パターンである。E の類型は、ウル・デ・リコの『虹伝説』にもみられ、日本でも、羽前小国の昔話中、「二〇銭の降る虹」や沖繩の動物昔話「ひばりと若水」の類話、等にみられる。ただ、E のもつ詩的空想性の美しさは、ケルト民族に目立つ秀れたものであろう。B につ

いてみると、「町を通った旅人から」とあり、「旅人」はアイルランドの地、すなわちシンギーの居住地以外のアイルランドの住人、ともとれるし、遠くギリシャやその他の地方の国の住人ともとれる。また旅人がどこかの国で仄聞した話ともとれる。後者とすれば、「虹脚埋室」信仰が世界に流布していたことが暗に匂わされていることになる。

Cの「虹」の脚が「とある泉の傍」とあるのは、安間清が指摘『虹の話』するように「聖水」信仰すなわち神聖なる水辺が神を祭るところであり、竜神はすなわち水神であり、「虹」はその「神竜」＝「水蛇」、であったとの原始民間信仰とのかかわりを裡に秘めた無意識なる発現的表現であろう。また、「鮮やかな七色をした虹」の「虹」の「七」色については、ヨーロッパ民衆の「虹」についての大方の認識「六」色（鈴木孝夫『日本語と外国語』）と異なり、あるいは訳者の日本の児童向けの作意が混入しているかも知れない。

「虹」の文化の問題として本話中一番重要なのは――部である。

さてこの昔話の成立が、どのあたりまで遡上りうるかについては、確証はないが、『虹の脚に黄金が埋まっている』という俗信は、古いギリシャ神話に繋がりのあることを想定しうるであろう」と、安間清は『虹の話―比較民俗学的研究―』（昭53、おりじん書房）の中で述べている。これは、ホメロスの『イリアス』の最終章にあたる、第二十四巻の、勇士ヘクトルの葬儀の次第を歌う場面に、「ところが、早生れの、ばら色の指をした曙が現われると、人々は栄えあるヘクトルの薪の堆積のまわりに

集まった。「一同一つのところに集合して後」まず彼らは火の力の及んだかぎりのすべての薪を輝くぶどう酒で消した。それから彼の兄弟たちや僚友たちが、泣きながら白骨を拾い集め、大粒の涙が彼らの頬を流れくだった。彼らは骨灰を取って、それらをやわらかい深紅の布で包んで、黄金の壺に入れた。彼らはそれをただちにうつるな墓穴に収め、その上に隙き間のないように大きな石塊を積んだ。すばやく墓を築き、しかしそうしている間に、立派な脛当をつけたアカイア人たちが早くも攻撃を加えることのないために、警戒兵たちが周囲に到るところ配備された。やがて墓を築き終ると、彼らは帰営した。しかしさらに集まって、ゼウス大神に養われた王・プリアモスの宮殿において素晴らしい（吊いの）饗宴を張った。」とあるが、それを指しているようである。かくギリシャ神話、すなわちエーゲ文明との関連もありそうではあるが、<sup>37</sup>は、アイルランドの昔話であることを考えると、その地の原住民たるケルト族のことが考えられる。例えば、「虹の端にある『黄金の壺』は、ケルト族の『聖杯』の別型であり、また子宮のシンボルであって、月女神（マナ）が彼女の西方の楽園で、死者の靈魂をしまっておく壺と関連があった。」の言も、その前段階あるいは先蹤的な伝説として同時に容認しておきたい。これが敷衍されて「一般にヨーロッパの全体にわたって虹の地に触れているところには幸運があると言われている。それは、虹の端には黄金の壺か又はその他の宝物が、それを発見する人のために準備されているからである。」となるのであろう。ただ隠されている宝物は土地によって異なる。例えば、「アイルランドでは金時計、ギリシャでは金の鍵、

ノルウェーでは金の水さしとスプーン<sup>(注4)</sup>」等々である。そしてこの《虹脚埋宝》信仰に通ずるものは、ヨーロッパのみならず「アフリカ大陸のCongo族・北アメリカ原住民、南米のアラワク族・マレー人、イランの回教徒<sup>(注5)</sup>」の中にも見出される。日本周辺では、まず中国で、資料<sup>(注6)</sup>中の「薛願」・「韋臯」中《虹》の《吐金》《出世》説話中にその精神が見られ、朝鮮の慶尚南道咸陽郡では、「虹の立つところには宝物がある。」<sup>(注7)</sup>と言いつた。台湾の基隆付近では、「昔お爺さんが虹の両端を握つたらば黄金が出た<sup>(注8)</sup>。」と伝えられている。「龍」<sup>(注9)</sup>との混交概念では「(400年)三月龍が鄒羅の井戸に現れた」<sup>(注10)</sup>「はじめて王都の市場が開設され、各地の商品が集った。」<sup>(注11)</sup>というのがある。<sup>(注12)</sup>〔注1参照〕

日本本土では九州阿蘇地方の俚諺に「黄牛の背に乗って虹の下をくぐれば長者になる」<sup>(注13)</sup>「民俗学」五ノ七」というのがあり、「虹の両脚の下には宝物が埋まっている」という俗信は高知県地方<sup>(注14)</sup>「同」三ノ四にあり、安間清によると、これは信州下高井郡方面、遠く北に飛んで奥州羽後の国にもあるという。そして、日本古文藝に入って、『日本書紀』<sup>(注15)</sup>『日本霊異記』<sup>(注16)</sup>『枕草子』などに影を落としているようである。『百鍊抄』に見える「上皇六条中院前池虹立。可立市之由……」<sup>(注17)</sup>「高陽院立市。依虹蜺立也。」<sup>(注18)</sup>の記載とも間接的に繋つていよう。すなわち、「境界領域<sup>(注19)</sup>」における「交易」の民俗の思想とも混融する性質のものであるう。

この《虹》と「市」との関連は、中国の国際的市場である《虹口》<sup>(注20)</sup>を想わせ、遠くメラネシア・ミクロネシア諸島における《虹》とその呪詞を伴う原始的贈答交換儀式——「開市」を想わ

せ、ポリネシアに属するハワイ諸島に現に行なわれている「レインボーセール」<sup>(注21)</sup>を想わせる。そして、同じくオセアニアのオーストラリアの原住民の神話や宗教儀式において、虹蛇は、造物者、文化的英雄、豊饒・多産の神、天父のように重要な存在である<sup>(注22)</sup>。という《虹》のプラス面の評価と接触していよう。やはり、その根源は、フンク、ワグネル、安間清のいう《虹》の原始観すなわち《水》蛇《天》蛇<sup>(注23)</sup>（＝神龍）観のグローバルな存在に吸収されるものであらう。

かく、世界各地に分布していた《虹脚埋宝》信仰は、黄金を求めて虹を追跡する儚い夢想家「虹を追う人」<sup>(注24)</sup>（rainbow chaser）の語を生み、拡散された「虹の彼方に」<sup>(注25)</sup>の句が、さらに『聖書』世界的至福感と結びついて、人を浪漫的陶醉境に誘い込む。

〔注1〕 田中秀央・高津春繁訳『世界文学全集Ⅲ—(1)—ホメロス・アイキユロス他』(昭41、河出書房)による。ただし、部は稿者による。

〔注2〕 山下主一郎、他訳『神話・伝承事典』(昭63、大修館書店) P.665。但し、〓は稿者による。「子宮」は、Davidson(前出)によれば、「子宮」は、rachamin(母の愛)または「思いやり」の擬人化されたもの。サンスクリット語のkaruna(菩薩の慈悲)と比較される。」とあるが、もっと直接的なもののような気がする。

〔注3〕・〔注5〕 Funk and Wagnell 前掲辞書。

〔注4〕 向井正・向井苑生『反射屈折回折散乱』(昭59、地人書館)中「二シ伝説」より。

〔注6〕・〔注7〕 安間清著『虹の話』(前出) P.64。

〔注8〕 雄略天皇三年夏四月「乃於河上虹見如蛇四五丈者。掘虹起處而獲神鏡。」(岩波・日本古典文学大系本)

- (注9) 信敬三寶得現報縁 第五「有五色雲 如電如度北 自而往 其雲道 芳如雜名香 觀之道頭有黄金山」。(注8)と同)
- (注10) 第十四段「を(お)ふさの市」。(三卷《能因》本)
- (注11) 「市と虹」(勝俣鎮夫筆。『日本の社会史』第四卷(昭61、岩波書店)所収)
- (注12) Bronislaw Malinovsky "Crime and Custom in Savage Society" (『民俗学』第二巻第九号(昭和5・6)に中村康隆紹介)「トロブリアンド、アムフレット、ダントルカスト、トュベトユベ、ニウギニア東南部諸島、マーシャル、ベンネット、ウツドラーク、ラウラン等の島々に住まふ諸共同態によつて行はれてゐる」
- (注13) Funk and Wagnall 前掲辞書。
- (注14) 萩原朔太郎の著作にも『虹を追ふひと』(限定特装版(1970、青娥書房)がある。
- (注15) 「Over The Rainbow」(タニイ・ケイ主演「虹を掴む男」の映画の中で、ジュディ・ガーランドが歌う歌 Words by E. Y. HARBURG Music by HAROLD ARLEN)や、若山喜志子編『虹は彼方に―牧水の歌六百首撰抄―』(昭42、東京美術)、マリ・ジョゼフ著・原もと子訳『虹のかなたに―リウマチと闘う女性の自伝―』(昭59、婦人の友社)、ジェシカ・ジェフリーズ著・松本牧子訳『虹の彼方へ』(昭59、ハーレクイン・エンタープライズ日本支社)、アンハリー・熊谷淳子訳『虹の彼方に』(昭61、ハーレクイン・エンタープライズ日本支社)、高橋源一郎著『虹の彼方に(オーヴァーザレインボウ)』(昭59、中央公論社)、岑清光著『虹のかなたに』(続七曜メルヘン(昭43、近代文芸社)等がある。